

ふ事ことじつ有の顔だりうちあつたるありたり
 おれねがうへよきこじぬも称もすうとらしてせとまうか
 ひりわも聞うてなくしゆよとよつてのけよま
 あくすまうゑ本めもよりうりもとくまくま
 おれぬれがれありけに、入て用もわすかうりて
 もうほとこみれ、甚り人のまもくもとさうくらうと
 いふとじゆゆうひらめつてのりんのをひ
 とう、さうづからしてたゞ一ノれのそくやく
 さまたすれどもあつまゆはまうわをやうめよ
 まゆをうけむれどもあつまゆはまうわをやうめよ
 まゆをうけむれどもあつまゆはまうわをやうめよ
 まゆをうけむれどもあつまゆはまうわをやうめよ

無刊記古活字本 宇治拾遺物語卷一の三冒頭（宮内庁書陵部蔵）

十三	三笠山源吉水道の事	正
目		
次		
解		
凡		
例		
一説		
宇治拾遺物語	序	
卷一	音志良善の事	正
卷二	鶴入周業源氏の歎の踏の事	正
卷三	唐に卒都婆血つく事	正
卷四	大太郎盜人の事	正
卷五	藤大納言忠家物いふ女放屁の事	正
卷六	山伏舟祈り返す事	正
卷七	絵仏師良秀家の焼くるを見て悦ぶ事	正
卷八	藤六の事	正
卷九	雀報恩の事	正
卷十	小野篁広才の事	正
卷十一	妹背嶋の事	正
卷十二	石橋の下の蛇の事	正
卷十三	利仁芋粥の事	正
卷十四	用經荒巻の事	正
卷十五	鼻長僧の事	正
卷十六	對	
卷十七	對	
卷十八	對	
卷十九	對	
卷二十	對	
卷二十一	對	
卷二十二	對	
卷二十三	對	
卷二十四	對	
卷二十五	對	
卷二十六	對	
卷二十七	對	
卷二十八	對	
卷二十九	對	
卷三十	對	
卷三十一	對	
卷三十二	對	
卷三十三	對	
卷三十四	對	
卷三十五	對	
卷三十六	對	
卷三十七	對	
卷三十八	對	
卷三十九	對	
卷四十	對	
卷四十一	對	
卷四十二	對	
卷四十三	對	
卷四十四	對	
卷四十五	對	
卷四十六	對	
卷四十七	對	
卷四十八	對	
卷四十九	對	
卷五十	對	
卷五十一	對	
卷五十二	對	
卷五十三	對	
卷五十四	對	
卷五十五	對	
卷五十六	對	
卷五十七	對	
卷五十八	對	
卷五十九	對	
卷六十	對	
卷六十一	對	
卷六十二	對	
卷六十三	對	
卷六十四	對	
卷六十五	對	
卷六十六	對	
卷六十七	對	
卷六十八	對	
卷六十九	對	
卷七十	對	
卷七十一	對	
卷七十二	對	
卷七十三	對	
卷七十四	對	
卷七十五	對	
卷七十六	對	
卷七十七	對	
卷七十八	對	
卷七十九	對	
卷八十	對	
卷八十一	對	
卷八十二	對	
卷八十三	對	
卷八十四	對	
卷八十五	對	
卷八十六	對	
卷八十七	對	
卷八十八	對	
卷八十九	對	
卷九十	對	
卷九十一	對	
卷九十二	對	
卷九十三	對	
卷九十四	對	
卷九十五	對	
卷九十六	對	
卷九十七	對	
卷九十八	對	
卷九十九	對	
卷一百	對	

目 次

四

卷五

- 三 以長物忌の事 六
五 陪従家綱行綱互ひに謀りたる事 六

- 七 仮名暦あつらへたる事 六
十 ある僧人の許にて氷魚盃み食ひ

- たる事 六
十二 別に道極である事 六

- 卷六 三 留志長者の事 六
五 観音蛇に化す事 一三

- 卷七 一 五色の鹿の事 一九
二 播磨守為家の侍佐多の事 二四
三 三条中納言水飯の事 三

- 卷八 三 信濃国の聖の事 四
六 猿師仏を射る事 一五

- 卷九 五 恒正が郎等仏供養の事 一五
八 博打聟入の事 一四

- 卷十 一 伴大納言応天門を焼く事 一六
六 吾妻人生贊をとどむる事 一七

- 卷十一 六 藏人得業猿沢の池の龍の事 一六
九 空入水したる僧の事 一七

五 長谷寺参籠の男利生にあづかる

事 二二
三 二二

卷八

- 三 信濃国の聖の事 四
六 猿師仏を射る事 一五

- 卷九 五 恒正が郎等仏供養の事 一五
八 博打聟入の事 一四

- 卷十 一 伴大納言応天門を焼く事 一六
六 吾妻人生贊をとどむる事 一七

- 卷十一 六 藏人得業猿沢の池の龍の事 一六
九 空入水したる僧の事 一七

五 長谷寺参籠の男利生にあづかる

事 二二
三 二二

卷八

- 三 信濃国の聖の事 四
六 猿師仏を射る事 一五

- 卷九 五 恒正が郎等仏供養の事 一五
八 博打聟入の事 一四

- 卷十 一 伴大納言応天門を焼く事 一六
六 吾妻人生贊をとどむる事 一七

- 卷十一 六 藏人得業猿沢の池の龍の事 一六
九 空入水したる僧の事 一七

十二 出家功德の事 一九
卷十二 七 増賀上人三条の宮に参り振舞の

- 事 二四
四 門部府生海賊射返す事 三三
十一 後の千金の事 三三

写 真 — 長 尾 宏

志 村 ひろ子

卷十五

- 四 門部府生海賊射返す事 三三

- 十一 後の千金の事 三三

写 真 — 長 尾 宏

志 村 ひろ子

十三 清滝川聖の事 三三

- 五 夢買ふ人の事 三〇
二 寛朝僧正勇力の事 三〇
七 北面の女雜仕六の事 三三

卷十三

- 五 夢買ふ人の事 三〇
二 寛朝僧正勇力の事 三〇
七 北面の女雜仕六の事 三三

卷十四

- 二 寛朝僧正勇力の事 三〇
七 北面の女雜仕六の事 三三

治二年整版本文庫本　京大本→京大學生本　吉田本→吉田幸一丑齋本　瓦當本（瓦當本）→瓦和名抄→和名類聚抄本　名義抄→類聚名義抄（觀智院本）題記字類抄→伊呂波字類抄本・私註→宇治拾遺物語私註　古典全書→日本古典全書宇治拾遺物語。　古典大系→日本古典文学大系宇治拾遺物語　古典全集→日本古典文学全集宇治拾遺物語　全註解→宇治拾遺物語打聞集全註解

一、本書はもっぱら先学諸氏の注釈・研究に負つて成ったものである。武藏野書院の長尾宏氏には本書の刊行に際し、多大の御協力を得、また渡辺充子氏には本文書写の御協力を得た。深く感謝申し上げる。

二、畠原・文若の事跡、重慶の歴史ひそひれ、重要な事跡を強調する旨願ひだ。

三、冒頭の歎き詠れる大意、うほひのいさむを用意する所ひだりない。

学習の学習引導宜びる所、冗談書も多歎引、あるいは歎引を対答書も多歎引を以ておは、学

歎宜體と本學卷序引つて頗る。まことに御承知御了承を歎宜と取れ、過程、過程、過程と見ゆる。

一、本文の御観りあがむと御承本の忠実なる御観じよが、御承のやうとせば御承字意未不即の御承見、參照本うつば。

二、本文が『日本古典文学大系』に入り、『日本古典文学全集』も同じ、宮内省書類部蔵、黒田屋古書学本

三、本書引『宇治拾遺物語』の中の外史御體四十六語を附録うつす。

一、本書引大學・高専講義の学生本、恭養うつす、あるいは大學入試学日記もつた自賛があると云ふ頃

きもじて御裏うつす。

凡　例

宇治拾遺物語　序

世に宇治大納言物語といふ物あり。この大納言は隆國といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年たかうなりては、暑さをわびて、暇を申して、五月より八月までは、平等院一切経藏の南の山ぎはに、南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。

通訳　世間に宇治大納言物語というものがある。この大納言は隆国という人である。西宮殿の孫にあたり、俊賢大納言の次男である。年とつてからは暑さを厭い、休暇を願い出て、五月から八月までは平等院の一切経藏の南の山ぎわに、南泉房という所に籠っておられた。そこで宇治大納言と申したのである。

語類文法

(一)　十一世紀後半に成立したと推定される説話集。作者は源隆國。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と密接な関係があり、それらの説話の素材となっていると考えられるが、現在は散佚したらしく、原形は不明である。(二)　太政官の次官で、大政に参与し、奏上、伝宣の役を務めた。右大臣の次に位する。(三)　醍醐源氏、權大納言源俊賢の次男。『後拾遺集』以下の作者。正二位、權大納言、太皇太后宮大夫。承保四年(997)没。七十四歳。(四)　源高明。醍醐天皇の皇子。醍醐源氏の祖。正二位、左大臣、左大將。西宮左大臣と号す。安和の変に座して太宰権帥に左遷、天祐三年(993)帰京。『西宮記』の著者。天祐三年(993)（一説に天元五年)没。六十九歳。(五)　源高明の三男。右兵衛督。



宇治拾遺物語　序